

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350714

研究課題名(和文) スポーツ動機づけと対人関係性：量的・質的分析による相互補完的アプローチ

研究課題名(英文) Sport motivation and interpersonal relations: Complementary approach using the quantitative and qualitative analysis.

研究代表者

西田 保(Nishida, Tamotsu)

愛知学院大学・心身科学部・教授

研究者番号：60126886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツ動機づけと対人関係性について、量的および質的な分析方法を併用して検討した。最初に、本研究の中核となる対人関係性を測定する尺度作成を試み、信頼、理解、受容の内容で構成される質問紙尺度(社会的一体感尺度)を開発した。尺度の信頼性および妥当性は十分に満足されるものであった。社会的一体感は、中学生、高校生、大学生とも、女子の方が男子よりも高かった。中学生と高校生においては、運動部所属の方が無所属者よりも高かった。また、スポーツや勉強での動機づけ、被受容感、楽しさ、満足感と正の相関を示し、被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感とは負の相関を示した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the relationship between sport motivation and interpersonal relations with others by complementary approach using the quantitative and qualitative analysis. First, a questionnaire test to measure the sense of social togetherness (SST) including trust, understanding and acceptance was developed. The reliability and validity of the test were sufficiently high. The SST for females was higher than those for males. The SST for students who had taken part in extracurricular sports club activities was higher than those for students with no such experience. Positive correlations existed between the SST and motivation in studies and sports activities, feelings of enjoyment, satisfaction in everyday life and sports, and sense of acceptance of everyday life. On the other hand, negative correlations were found between the SST and a feeling of rejection, depression, and alienation.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：スポーツ活動 動機づけ 対人関係性

1. 研究開始当初の背景

最近の動機づけ研究を概観すると、個人の動機や有能感が充足される課題が提供されたり、自律的な目標が設定されたりしても、それらを周りの人とのどのような関わりの中で遂行するののかによって、その人の動機づけは大きく影響されることが予想される。特に周りの人からの評価や認知のされ方によって、その後の動機づけは強く影響されると思われる。このような他者との関わりに関して、自己決定理論を提唱した Ryan and Deci (2000) は、自律的動機づけの基本的な心理的欲求の中に「関係性」をあげている。他者との良好な関係や結びつきを感じたいという欲求のことであるが、抽象的な表現であり具体的な内容にまで言及されていない。

このような対人関係性に関連して、本研究代表者は、暫定的ではあるが「社会的一体感」という用語を提案している。これは、重要な他者からの信頼と理解を持って、自分は暖かく受け入れられていると感じていることを意味している。周りからの信頼、理解、受容は、人間行動の基礎である。自分を信頼し理解してくれる他者の存在を感じ、自分は認められている、受け入れられていると感じるときに強く動機づけられると推測される。すなわち、このような感覚が高ければ、様々な場面(学校、スポーツ活動、家庭、職場など)においても積極的に努力することができるかと予想される。また、抑うつ、不安、非行などメンタルヘルスの改善にも役立つことが期待される。本研究代表者が行った予備調査において、このような感覚は、自律的な学習動機と正の相関、抑うつとは負の相関が認められている。

スポーツにおける動機づけに関する研究は、これまでかなり多く行われてきた。そして、スポーツ参加やスポーツ技能の熟達化など様々な領域でその重要性が指摘されている。しかしながら、研究の視点は、個人的要因(動機、期待、有能感、自己決定、達成目標など)を中心とした理論構築やそれに依拠した研究に向けられており、個人を取り巻く学習環境(動機づけ雰囲気、環境の認知など)や人間関係(友人関係、指導者との関係など)といった環境要因については、必ずしも明確にされていないという現状が指摘される。

2. 研究の目的

本研究では、環境要因の中の「対人関係性」を取り上げ、それらがスポーツにおける動機づけにどのような影響を与えているのかに

ついて、量的および質的な分析を併用した相互補完的なアプローチにより、横断的・縦断的に検討することを目的とした。動機づけ研究において、環境要因を取りあげ、しかもこのような研究手法を用いて検討した試みは、過去に例がない。

3. 研究の方法

(1) 国内外の文献研究

スポーツ動機づけと対人関係性に関連する内外の研究をレビューし、これまでに明らかにされてきた知見を整理する。

(2) 理論的枠組み

文献研究を手がかりとして、スポーツ動機づけと対人関係性の解明に向けた作業モデルを作成する。

(3) 対人関係性の測定尺度の開発

心理検査の測定尺度を作成する標準的な方法論に準拠して、対人関係性を客観的に測定できる尺度を作成する。

(4) 横断的研究

対人関係性と他の心理的概念との関連性、対人関係性の構成要素、規定要因、発達差、スポーツや日常生活場面などへの影響などについて、横断的に検討する。得られたデータは、量的および質的に分析する。

(5) 縦断的研究

スポーツ活動の継続によって、対人関係性がスポーツ動機づけに及ぼす因果関係を明らかにする。ここでも、量的・質的分析を併用するが、後者を優先する。

(6) 動機づけモデルの構築

以上の研究を総括して、スポーツ動機づけと対人関係性に関するモデルを構築する。

(7) 対象者

中学生、高校生、大学生を調査対象とする。

4. 研究成果

本研究の主たる目的は、スポーツ動機づけと対人関係性について、量的および質的な分析を併用した相互補完的なアプローチにより検討することであった。

以下には、各年度における研究経過と主な研究成果、国内外における位置づけとインパクト、今後の展望などを記載する。

(1) 2014年度

本研究の中核となる対人関係性を測定する尺度を開発した。心理検査の測定尺度を作成する標準的な方法論を用いて尺度の作成を試みた。

調査対象者は、5つの学校の高校1年生か

ら3年生までの男子502名、女子410名の合計912名であった。年齢の範囲は、15歳から18歳、年齢の平均値は16.2歳であり、現在の運動部に所属している者が486名、所属していない人が(415名)であった。

スポーツ動機づけと対人関係性に関連する内外の研究レビューを踏まえて、本研究では、スポーツ動機づけに影響を及ぼす対人関係性として、自分の周りにいる重要な人から、「信頼され」「理解され」暖かく受け入れられている」という感覚が重要であると判断した。そして、これらに対して暫定的ではあるが「社会的一体感」と命名した。社会的一体感が及ぼす影響は、図1に示す通りである。

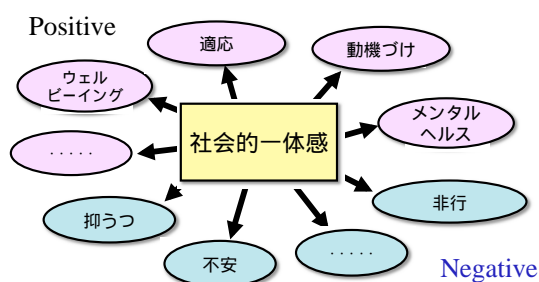


図1 社会的一体感の影響

社会的一体感を構成する内容を明らかにするために予備調査など種々検討を行った結果、「信頼」「理解」「受容」で構成される以下の9項目が選出された。

- 私は何かをするときに頼りにされている (信頼)
- 周りの人は私のことをわかってくれている (理解)
- 私は周りの人から家族のように接してもらっている (受容)
- 周りの人は私のことを信頼してくれている (信頼)
- 周りの人は私のことをよく知ってくれている (理解)
- 私は周りの人とつながっているようにみられている (受容)
- 私は周りの人から重要なことを任されている (信頼)
- 周りの人は私のことを理解してくれている (理解)
- 周りの人は私を心から迎えてくれている (受容)

これらの質問項目に対して、探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、固有値1.0以上の基準と固有値の減衰

状況から、対人関係性は一次元(一因子)で構成されていると判断された。そこで、これらの9項目で構成される尺度を「社会的一体感尺度」と命名した。

社会的一体感尺度の信頼性を折半法と再テスト法によって検討した。その結果、いずれも高い値が得られた(折半法 = .928、再テスト法: 4週間間隔 $r = .75$)。

社会的一体感尺度の得点を示したのが、図2と図3である。女子の方が男子よりも高い得点を示した。女子の親和欲求の高いことがこれまでの研究で指摘されており、そのことが社会的一体感得点に影響したのかもしれない。

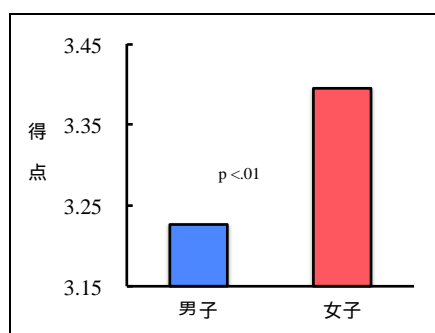


図2 社会的一体感の性差

また、運動部に所属している者の方が、所属していない人よりも、社会的一体感得点が高かった。運動部経験が社会的一体感を形成する貴重な場である可能性が示唆された。今後は運動部において、どのような活動内容や経験が社会的一体感に影響しているのかについて検討する必要がある。

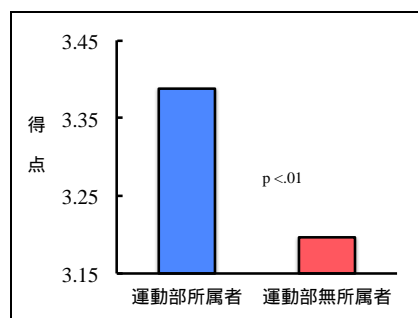


図3 社会的一体感の運動部所属差

社会的一体感とスポーツ動機づけに関連する諸変数との相関を示したのが表1である。その結果、社会的一体感と勉強やスポーツでの動機づけの間には中程度の正の相関が認められた。また、日常生活やスポーツの楽しさおよび満足感、被受容感とも中程度からやや高い正の相関が認められた。これに

対して、被拒絶感や抑うつとの間には、中程度の負の相関が認められた。これらの相関関係は、当初の仮説通りであり、すなわち、周りの人から信頼と理解を持って大切に扱われ、自分は暖かく受け入れられているという感覚が高ければ、学校やスポーツ活動において意欲的に取り組むことができ、また、被拒絶感も低く、抑うつに陥らず、メンタルヘルスの改善にも役立つことが示唆された。

表1 社会的一体感と諸変数との相関

	動機づけ (勉強)	動機づけ (スポーツ)	楽しさ	満足感	被受容感
男子	.304	.433	.447	.446	.765
女子	.322	.341	.357	.370	.675
運動部所属者	.284	.384	.378	.391	.743
運動部無所属者	.303	.305	.364	.354	.718
全対象者	.303	.360	.388	.389	.731

表2 社会的一体感と諸変数との相関

	被拒絶感	抑うつ	対人的 疎外感
男子	-.409	-.325	-.511
女子	-.437	-.389	-.591
運動部所属者	-.343	-.268	-.463
運動部無所属者	-.499	-.369	-.609
全対象者	-.424	-.333	-.546

以上、社会的一体感尺度の構成概念妥当性、因子的妥当性、基準関連妥当性（対人的疎外感、被受容感、被拒絶感など）の検討を行った結果、いずれも妥当性の高い良好な関係が認められた。これにより、次年度以降の円滑な実現に向けて準備態勢が整った。社会的一体感尺度の開発は、本研究の遂行だけでなく、対人関係性に関する様々な研究を進展させていく上で重要な意義と役割がある。

(2) 2015年度

本年度は、前年度で明らかになった理論的背景や対人関係性の測定尺度を用いて、スポーツ動機づけと対人関係性に関わる諸変数との関連性を明らかにした。また、運動部所属者に半構造化面接を実施しこれらの関連性を検討した。得られた主な結果は、以下の通りである。

高校生を対象に作成した社会的一体感尺度を、中学生、大学生にも実施したところ、尺度の信頼性（折半法、再検査法）および妥当性（構成概念妥当性、因子的妥当性、基準関連妥当性）において、いずれも高い

結果が得られた。

社会的一体感は、中学生、高校生、大学生とも、女子の方が男子よりも高かった。また、中学生と高校生においては、運動部所属の方が無所属者よりも高かった。これは、スポーツを行うことによって社会的一体感が高まることが予想され、運動部活動の効果が示唆される。

社会的一体感は、被受容感、楽しさ、動機づけ（スポーツ、勉強）満足感と正の相関を示し、被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感とは負の相関を示した。

このような量的研究の結果を裏づける知見が、運動部所属者を対象とした面接においても指摘された。

(3) 2016年度

最終年度は、運動部活動の中で社会的一体感をどのように体験しているのかについて、高校のバスケットボール選手を対象にインタビューを行い質的に分析した。その結果、社会的一体感は、「安心感」「役割感」「納得感」という相互に有機的に関連し合う3つのカテゴリーによって構成され、それらが周囲との関わりの中で自ら作り上げた主体的な感覚によって展開される構造が示唆された。

表3 社会的一体感にかかわる体験を構成する階層的カテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	主な意味内容要素の標題	主な意味内容要素(発話の一部)
安心感	信頼	気持ちを分かち合う感覚	練習では褒められたことでも叱られたことでも、みんなと一緒にその時の気持ちを分かち合ってるから、お互い信じ合える感覚があります。
	受容	受け入れてくれる確信	聞いてくれるって言う信頼は今出来上がっていると思います。分かれます。みんなが受け入れてくれます。
役割感	期待	期待される緊張感	私自身が周りのみんなから期待されているという感覚は、どこか緊張感もあり、自分への納得感にもつながり、私は好きな感覚です。
	支援	意義を持つかわり感	いろいろな知識を身につけて、怪我の対応をしておきたい。みんなに聞かれたときに何でも答えられるようになります。
納得感	理解	気持ちがわかかって行動する	初めは引退すると先生に言ったのですが、やっぱりみんなもやると言っていたし、みんなとまだまだ一緒にやりたいし続けたいって思えるんです。
	応答	体験の共有を通じた深い共感	私がチームのメンバーと共感できる機会って言うのは良い時ばかりじゃないと思うんです。プレーしてる時に怒られたらその悔しさも、やっつて、プレーしてるからこそ見てより深く表現し合えるし感じられると思うんです。

これらの結果は、これまでの量的研究の結果を裏づける知見として考えられるが、社会的一体感と動機づけとの因果関係や影響・促進要因などの詳細については、今後の研究課題として残された。

(4) 国内外における位置づけとインパクト

本研究で「社会的一体感尺度」が開発されたことから、対人関係性に関する様々な研究

を遂行することが可能になった。また、これによって新しい研究知見の蓄積が期待できることから、この尺度の開発は大きなインパクトを与えたと考えられる。

また、本研究で得られた研究成果は、日本体育学会および日本教育心理学会で発表した。いずれの学会においても質問やコメントが数多く出された。また、スポーツ以外の研究領域からの質問も散見された。これらの事実は、本研究に対する関心の高さを示すと同時に、スポーツ心理学だけでなく他領域の研究としても評価されていることを示している。

(5) 今後の展望

本研究において、社会的一体感とスポーツや勉強場面での動機づけと正の相関があることが示された。しかしながら、それらの因果関係や影響要因や促進要因などについては、詳細に検討するまでには至らなかった。また、図4に示すように、社会的一体感の様々な場面での影響性、文化間比較、発達差など、今後の研究課題が指摘される。

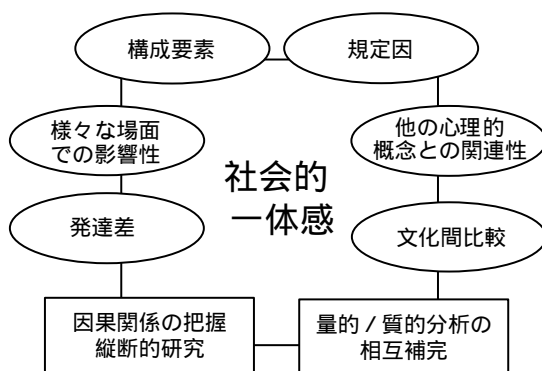


図4 今後の課題

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2件)

北村勝朗・西田 保「運動部活動の中で社会的一体感をどのように体験するのか 高等学校女子バスケットボール選手を対象とした質的分析」日本教育心理学会、2016.10.9. サンポートホール・かがわ国際会議場(香川県・高松市)。

西田 保「社会的一体感と動機づけ関連変数との相関分析」日本体育学会、2015.8.25. 国士館大学(東京都・世田谷区)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 保 (NISHIDA Tamotsu)
愛知学院大学・心身科学部・教授
研究者番号：60126886

(2) 研究分担者

北村 勝朗 (KITAMURA Katsuro)
東北大学大学院・教育情報学研究部・教授
研究者番号：50195286